長崎浩斎——人と業績

津田進三

杉田玄白の名著『蘭学事始』は、何故か江戸時代の筆写本が極めて少なく、しかもそれらには『蘭東事始』と『和蘭事始』という二種の題名が伝えられているが、『蘭学事始』と題する筆写本はまだ発見されていない。この題名の疑問をいち早く指摘したのは長崎浩斎である。彼は師の大槻玄沢から贈られた「蘭東事始」をみて、原名は『蘭学事始』である、と注目すべき主張を行なっている。浩斎の医学史への大きな関心は、彼が一生を通じて貫いた「学は原委を究めざるべからず」という信念によるものであった。

長崎浩斎は諱を健、字は中正、通称を愿禎といい、寛政十一年（一七九九）九月七日越中高岡の蘭方外科医長崎蓬洲の二男に生まれた。父の蓬洲は楢林由仙に蘭方を学んで蘭説訳書を好み、教養豊かな地方の名医として異例の法橋になるなど多方面に活躍したが、彼は「子女ヲ教育スルニ常規ヲ以テセズ」来遊の名士たちに嘱して早くから浩斎に英才教育を施した。そのため漢蘭老仏心学国学から詩書絵画まであらゆる分野に一流の且つ個性的な名家に教えを受けており、彼の生涯の師友は海保青陵、市河寛斎、市河米庵、大窪詩仏、脇坂義堂、山本梅逸、菊池五山、小島宝素など誠にきらびやかなものであった。

しかし浩斎の生涯を決定づけたものは文化十年（一八一三）富山に来遊した蘭方眼科の高峰幸庵への師事であった。杉田玄白、大槻玄沢に蘭方を学び、吉益南涯に古医方を、賀川玄迪に産科を、土生玄碩に眼科を夫々学んだ高峰幸庵は、十五歳の浩斎に大いに嘱目した。幸庵は「人体には各々機関があり、治病の道は自然に復するにある」と教え、「眼科のためには眼球の理を、またそのためには全身の理を知らねばならぬ」として『解体新書』を説き、『医範眼目篇』を明らめたが、一方では古医方や賀川流産科をも授けている。

文化十四年浩斎は江戸へ出て大槻玄沢、杉田立卿に師事し、河口祐順らの友人を得て帰国したが、その後も玄沢から頻回に手紙による指導を仰ぎ、更に玄沢の没後は小石元瑞に師事して研さんをつづけ、越中で最も高名の蘭方医となっている。浩斎は「陰陽ノ二ツハ天地人物ノ間ナクンバアルベカラザルモノナリ」と述べて陰陽を認めたが、「然レドモ陰陽ニ五行ヲツケテ云ユヘニ古方家蘭学者ハ笑フ也」と思弁に依存する後世方を排し、一方理論的考察を重んじない古医方にもくみせず、正常を知り病の変化を論じて治を定めるという蘭医方をえらんだのである。医理と治術の一体化こそが彼が理想であった。

越中高岡は加賀藩領の中でも旧城下町から町人の町へと変革した特異な性格を持つ町で、町人階級の進歩性が著明であった。そのため西洋の近代自然科学も実用的合理的として余り抵抗なく受容されたが、時代の風潮たる知識層の文人趣味も豊かであった。高岡詩壇の中心となった浩斎も「見識不定こそ私の身上」と自ら揚言して、あらゆる分野の学問芸術に大きな関心を抱き、彼の蔵書は数千巻にも及んで特に千字文と蒙求の蒐集は広く全国に知られている。この間『浩斎医話』『五泉堂医話』など多くの著作を試みて数種の刊本もあるが、特に蘭学への批判に答えた『和蘭医学解嘲』は興味深いものがある。

浩斎は蘭学に向けられた批判の著作を広く探求検討し、その主要論点は次の三点にありとした。即ちその一つは臓というものは形象の謂ではなく神気を蔵するものであって、死後の虚器をみても全く無意味であるとの論、二つは解剖し

て人体の内部構造を知っても治療に何の益もないとの評、三つは気候風土や人種の異なる外国の医学を知っても日本の医療の役には立たないとの説、などと受けとめ、そしてそれらに反論しつつ「蘭説を学ばんと欲すれば旧染を退け師につくべし」という漢方医堅田君翼の「解体説」に大いに共感を示している。異文化受容の困難さを知る浩斎の姿勢は、論争より啓蒙を選んだようである。

浩斎の学問は文献学的、実証的、帰納的であり、「瑣言タトヒ知レタリトモ益ナシ」との周囲の忠言もきかずに考証学に熱意をもやし、「無益ナガラ名医ノ小伝ヲアツメヲキタリ」と医学史への関心も強いものであった。浩斎は「名を求メテ利ヲ忘ルレバ仁ニアラズトモ俠ニ近シ」といい、「豪傑ノ士ハ田舎ヨリ出ル事古今多シ」と述べて自負と大志と勤勉の一生をおくり、元治元年（一八六四）九月十四日その生涯を閉じたのである。

（ＪＲ東海静岡鉄道健診センター）